

年間第 13 主日 マタイ 10：37～42 「弱さを身に負うがゆえに」

朗読された福音箇所を文字通り読めば、私のように家族の反対をおしてイエズス会に入った人は、「十字架を背負っているので命を得る」ように受け取れます。けれども、背負う十字架には他にもあります。今日は神学生の際の体験を分かち合います。

12 年間サラリーマンをして、勉強から遠ざかっていた私は、勉強ができないコンプレックスを持って過ごしています。そのことは今の時代だけでなく聖ビアンネ（1786～1895）の時代もそうでした。学問ができる、専門性がある人が教会の中心のような印象を持ちがちです。

神学生の際、精一杯努力はしても、自分の勉学のレベルが全然大したことない、と感じていました。「大学の先生たちが望む司祭像は勉強ができることなのではないか？」と思っていました。そんな時、秘跡論の具神父さんが「弱さを身に負うがゆえに」（神学ダイジェスト 59 号 M・J バックレー 岩島忠彦神父さん訳）の記事を紹介してくれました。（以下抜粋 一部表現を変えています）

司祭にふさわしい資質とはどのようなもののでしょうか？ 普通私たちは、その人がどんな業績をあげたか？ 知的能力は十分か？ 社会的な適応性があるか？ 宗教心が深く真面目な人であるか？ といったことを問題にします。しかし、バックレー氏は、そのような基準を越えて「この人は司祭になるだけの弱さを十分に持っているか？」ということが、司祭の本質的な要素ではないか？ と言います。司祭職とは、自ら弱さを身に負われたキリストに倣う奉仕職である。丁度、奉仕職を脅かすように見える弱さ（勉学が苦手・語学に長けてない・話上手でもない・・・）のうちこそ、人の苦しみに対する感受性と心の開きが現れる。それが司祭の役務の本質的な奥義だ、と言います。

ヘブライ書によれば、この足りなさ、弱さにこそキリストの奉仕職と司祭職の力があります。

「事実、ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることができになるのです」（2：18）「この大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪は犯されなかったが、あらゆる点で同じように試練に遭われたのです」（4：15）

「この大祭司は、自分も弱さを身に負っているので、無知な迷っている人々を思いやることのできるのです。」（5：2）

司祭職の召し出しの本質的な部分として、欠如（足りないところがある）の中に留まることは、とても重要なことです。そうでなければ、司祭の生活を野望と才能の混ざり物にして世俗化してしまうかもしれない。あるいは、自分の弱さが司祭職を脅かすものと感じて、以前の決心（司祭を志す気持ち）を考え直してしまうかもしれない。

また、「弱さ」とは、決心したことが実現するように力を注ぎ、理想的な姿で成功するように、多大な努力をした後になお残る無能力です。この苦しみに開かれた心は、自分の将来の安全を確保することへの無能、何かの逆境から自分を守ることへの無能、恥や痛み・内面の苦悩から身を守ることへの無能力として現れる。

この記事の内容は、神学生の時だけでなく、ずっと当てはまります。イエス様の愛の教えは、できる人が脚光を浴びるのではなく「弱さ」を通して広がっていきます。私たち、それぞれに弱さや至らなさを抱えていますが、その十字架にこそ、福音を伝える力があります。そう理解して新しい週を過ごしましょう。